

空にわく金色の雲

小川未明

青空文庫

道であつた、顔見知りの人は、みすばらしい正吉の母にむかつて、

「よく、女手ひとつで、むすこさんを、これまでになさつた。」と、いつて、うしろについてくる正吉を見ながら、正吉の母をほめるのでした。

しかし、心から感心するように見せても、じつは母子のしがない暮らしを、あわれむというふうが見えるので、正吉は子供ながら、それを感じていましたが、母は、そう

いつて、なぐさめられると、気が弱くなっているせいか、すぐなみだぐんで、

「なにしろ、三つのときから、一人で育て、やつと来年は小学校を、卒業するまでにしました。」と、うったえるように答えたのでした。

あいては、もつと立ちいつて、二人の生活を知ろうとするのを、正吉は母のたもとをひっぱつて、

「さあ、早くいこうよ。」と、その場からはなれたのでした。

正吉は、そのときだまつていたけれど、自分の母を、きのどくに思いました。そして、母のためなら、どんな困難もいとわないと、心にちかつたのです。

「来年は、ぼく、おじさんの家へいくのだ。そうしたら、おかあさんは、一人になつて、

さびしいだろうね。」と、正吉しょうきちはいうのでした。

「いいえ、さびしいものかね。おかあさんは、はたらいて、はたらいて、そんなことわすれてしまえます。ただおまえが、早くはや大きくなつて、ひとり立ちだするのを、たのしみとしますよ。」と、母ははは、ねっしんに針はりをもつ手てをはこびながら、答こたえるのでした。

正吉しょうきちが学校がっこうからかえると、近所きんじよの武夫たけおくんとさそいあつて、原はらっぱへあそびにいき、草くさの上うえにねころんでいました。

「だれでも、ほかが、まねのできない技術ぎじゆつをもてば、えらくなれると、先生せんせいがいったね。」と、正吉しょうきちは学校がっこうで聞いてきた話はなしを、思いだしました。

「ああ、そうだよ。マラソン選手せんしゆとなつて、オリンピックで名なをあげるのも、図画ずががじようずになつて、名高い画家ががとなるのも、自分一人じぶんひとりだけの名誉めいよでなく、やはり国くにの名誉めいよだと、先生せんせいがいわれたよ。それも、自信じしんと努力どりよくすることが、たいせつなんだつて。」と、武夫たけおは答こたえました。

「ぼく、徒競走ときようそうに自信じしんがあるんだがな。」と、正吉しょうきちは目めをかがやかししました。

「そうだ、正ちゃんしょうちゃんは、いつも徒競走ときようそうでは、一番ばんだから、練習れんしゆして、マラソン選せん手しになるといいよ。」と、武夫たけおは手てをたたいて、正吉しょうきちの思おもいつきに賛成さんせいしました。

正吉しょうきちはきゆうに、からだをおこして、空そらをあおぎながら、しんけんに考かんがえこんだのです。そして、自分じぶんが、はなやかな世界せかいてき的の選手せんしゅとなった日ひのゆめを、目めにえがいたのです。

「なんで、そんなことを、きゆうにいいだしたの。」と、武夫たけおはふしぎに思おもつて、聞ききました。

「もし、そうなったら、ぼくのおかあさんが、どんなによろこぶだろうと思おもつたのさ。だれでも得手えてというものがあるから、それをのばせば、成せい功こうすると先せん生せいがいったので、ぼく、元氣げんきがででて、うれしくなつたよ。」と正吉しょうきちは、すなおに心こころのうちを、友ともだちにうちあげたのでした。

武夫たけおもいつになく、くつろいだ氣きもちになつて、正吉しょうきちをよろこばせようと、
「正ちゃんしょうちゃんはいい子こだと、うちのおとうさんも、おかあさんも、いつていたよ。正ちゃんしょうちゃんのおかあさんは、いまはくるしくても、正ちゃんしょうちゃんが大きおおくなれば、きつと樂らくをされるだろう。」

こうして、武夫たけおが両親りょうしんのうわさしたことをつげようとするのを、正吉しょうきちはうちけすようにして、

「ぼくのうちは、貧乏だし、なかなか上の学校へいかれない。来年は町のおじさんの店へ奉公して、夜学で勉強をするつもりだ。武ちゃんはいいおとうさんがあつて、安心して勉強強ができるから、きつと、えらくなれるだろう。ぼくは、自分の力だけで、やらなければならぬからね。」と、正吉は、日ぐれがたの空に、わきあがる雲を、じつと見ていました。

いま、西の空には、炎の流れるように、赤い雲が、うずをまいていました。そして、ほかに花びらを散らすように、おなじ色の雲が、ちぎれちぎれにとんでいました。それが、いつしか、一かたまりとなつて、たてがみをなびかせた金色のししの姿となつたり、高くかけあがる神馬の形をつくつたりして、はるかの青々とした地平線を目ざして、うごいていたのです。

正吉はしばらく、その雲のゆくえを見まもるうちに、空想は、町の文房具を売る店へと、とんでいました。ちようど、金色の雲が、たれさがったあたりに、その町はあるのです。空気とガラスの見さかいが、つかないほど、よくふき清められたまどの上のたなに、青くぬられた飛行機が、いまにもとび立ちそうなかっこうで、おいてあり、その下の台には、まっかな洋服姿のおどり子の人形が、片方の足を上げて立つて

いました。それは、野原のほらにさく赤あかいゆりよりも、はなやかであつたし、また川かわふちでかおる、のぼらの花はなよりも、目めにしみるまぶしさでありました。

「武たけちゃん、きみは、町まちの文房具屋ぶんぼうぐやにあるおもちゃを見た？」と、正しょうきち吉きちは、そのときぼんやりとして、ならんでいた武夫たけおに聞ききました。

「どんなおもちゃだつたかな。バットとグローブは、知しっているけど。」と、武夫たけおは、頭あたまをかしげていました。

「青あおい飛行機ひこうきと、赤あかいお人にんぎょう形ぎようさんだよ。」と、正しょうきち吉きちは友だちを見みて、たずねまし
た。

「知らなかつたな。」と、武夫たけおはてんで、そんなものに氣きがつかなかつたようです。正しょう吉きちは、やつと安あん心しんしました。もし、武夫たけおがそれをほしいと思おもえば、いつでも自分じぶんのものに、することができたからでした。

しばらくして、こんどは武夫たけおのほうから、

「正しょうちゃん、そんなに、いいおもちゃだつたの。」と、聞ききかえました。正しょう吉きちはそれこたに答こたえず、

「ねえ武たけちゃん、あの金きん色いろの雲くもをごらん。きれいだろう。そして、あちらの空そらをごらん。

あの青い色もきれいだね。ぼく、いままで見た、美しいものが、みんな目にうかんでくるんだよ。」と、正吉は、とび立つような、自分の心を、おさえきれなかったのです。

つぎの日の昼間、また二人は、この原っぱへきました。武夫がわざと三輪車で走るのを、正吉はそれと競走しようとして、素足で走りました。いまにマラソン選手になる自信をもとうとして、あやまって、足の指をいためました。

晩になると、その指がだんだんいたみだして、こらえられなくなったのでした。

「どんなに、なっているの。ちよつと見せな。」と、母にいわれると、正吉の顔は、たちまち、くらくらしました。

「おや、えらく、はれているでないか。」と、母はびっくりしました。こうした母のおどろき声は、正吉の心を、するどく、むちうって、しばらく足のいたみも、わすれたのでした。

ふだんから、母は正吉にむかって、おとうさんがいないのだから、わたしは、おまえ一人をたよりに生きていると、いわれたのが思いだされて、後悔で、胸が、はりさけそうになりました。

「あつ、おかあさん、いたいから、さわらんでおくれ。」と、足をひっこめようとすると、母は正吉のひざがしらに、ふれてみて、

「たいへんな熱だね。今夜、こうしておいて、さしつかえないものだろうか。」と、うろたえるのでした。

正吉は母があわれになって、すまぬことをしたと思いました。

「あすになれば、なおるよ。」と、いつて、がまんしながら、ねどこにはいったのでした。医者のもとへいったのは、それから二、三日あとのことでした。

「いままで、おじさんのところへ、お金のことで、たのみにいったおぼえはないのだが、こんどばかりは、そんなことを、いつていられないのでね。」と、道すがら母に聞かされたことは、正吉をせめるのでした。

正吉は、医者が自分の足を見て、なんというだろうか、このうえとも、自分たちをくるしめることに、なりはしないだろうか、診察室へはいると、なんとなく不安に、足がふるえたのでした。

「なぜ、もっと早く、見せにこなかったのです。」と、医者は、まゆをひそめながらいいました。

「注射ちゅうしゃをしていただいたら、なおりませんか。」と、母はははわが子この、身みの上うえを氣きづかいながら聞きくのでした。

「手ておくれなので、注射ちゅうしゃがきかなければ、手術しゅじゅつをするのですな。そうすると、二、三日にちにゆういん入院にんえんしなければなりません。」と、医者いしやはすこしの思おもいやりすらなく、ひややかに答こたえました。

医者いしやのところを出でると、

「家うちへかえつて、この水みづ薬ぐすりで、足あしのいたむところを、ひやしておいで。」と、母ははは正し吉きちとわかれしました。正しょう吉きちは、母ははのいくさきを、聞きかなかったけれど、たぶん、お

じさんの家いえへいったのだらうと思おもいました。

やがて、日ひがくれてしまい、しばらくたつて、母はははかえつてきました。

「世間せけんで、金かねもちといわれても、たのんでいけば、金かねがないというものです。はじめてだし、こんどだけは用ようだてするけれど、つきからは、おことわりだと、きっぱりいいました。おじさんだから、とくべつせわしてくれると思おもつては、いけません。たよりとなるものは、ただ、自分じぶんの力ちからだけです。わたしは、これから、せいっぱいはたらくことにします。」と、母はははいいました。

正吉しょうきちは、なんとも答えられず、あついなみだが、こみあげるばかりでした。

二、三日にち、顔をかおあわさなかつた武夫たけおは、学校がっこうからかえると、あそびにきました。

「きよう、先生せんせいが正吉しょうきちくんは、どうして休やすんでいるのだと聞きいたから、ぼくの三輪りんしゃ車しゃと競走きようそうして、足をあしいためたといつたら、なんでそんなばかのまねをするのかといつたよ。だから、ぼくは正ちゃんしょうちゃんは、マラソン選手せんしゅになるので、三輪車りんしゃなんかになんかに負まけられないのだと話はなしたら、先生せんせいは、人間にんげんの足あしと機械きかいと、いっしょになるかと笑わらつた。」と、学校がっこうの話はなしを告つげました。

「ぼく、つまらんことをした。」と、正吉しょうきちは、後悔こうかいしました。

「もつと、自分じぶんをたいせつにしなければ、いい選手せんしゅなんかになれないと、先生せんせいもいつていたよ。」と、武夫たけおはありのままをつげました。

「お医者さんいしやに注ちゅう射しやしてもらつたけれど、いたみがとれなければ、入院にゅういんして手しゅ術じゅつするんだつて、こまつてしまつたよ。」と、正吉しょうきちが力ちからなくいうと、

「とんだめにあつたね。そうそう、文房具屋ぶんぼうぐやヘグローブを買かいにいくと、店みせのガラスが、めちやめちやにこわれているので、おどろいた。聞きくと、トラックがとびこんで、だいじな品物しなものをこわしたと、店みせのおばさんがいつていたよ。」と、武夫たけおは、意外いがいなことを知しら

せました。

正吉しょうきちは、ゆめにさえ見たみ、あの青い飛行機ひこうきや、赤いおどり子この人形にんぎょうは、どうなつたろうと聞きくと、武たけちゃんちゃんは、見みえなかつたから、こわれたのかもしれないというのでした。

「それで、きみのほしいと思おもつたグローブはあつたの。」と、正吉しょうきちは聞ききました。
「とりこんでいるときだから、まけておくといつて、安やすくしてくれたよ。」と、武夫たけおはよろこびました。

「どうして、トラックが、店みせへとびこんだのだろうね。」
「運転手うんてんしゅが、お酒さけに酔よつていたつて、おばさんがいった。」と、武夫たけおはいいながら、このとき、先生せんせいが正吉しょうきちにいつた言葉ことばを思おもひ出だしたのか、

「やはり、酔よつたりしては、運転手うんてんしゅになれないんだね。」と、つけくわえました。

正吉しょうきちは下したを向むいて、だまつていました。足のいたみは、そのあくる日ひになつても、とれませんでした。母親ははおやは、子供こどものようすから、すぐにでも手術しゅじゅつを決心けっしんしたらしく、家いえの中なかをかたづけはじめたのです。

そのとき、ちやうど門口かどぐちへ乳飲ちのみ子ごをおぶつた女おんなこじきが立たつて、無心むしんをねがつたの

でした。正吉しょうきちの母ははは女おんなこじきを見て、子こもちだとは知しると、気きぜわしい中なかを、ふところからさいふをだして、金かねを手渡てわたしてやりました。女おんなこじきは、心こころからありがたく思おもつたらしく、いくたびも頭あたまをさげていましたが、そばで、痛いたい痛いたいと泣なき声こえでうったえている正吉しょうきちの姿すがたを見ると、おじおじしながら、

「どうなされたので、ございますか。」と、聞きいたのでした。

母親ははおやは、こういつてやさしく聞きかれたので、さすがに当惑どうわくしているときであり、気きも弱よわくなっていたので、こちらも、ありのままのことを——子供こどもが走はしつて、あそんでいるうち、足あしの指ゆびをいためて、注射ちゅうしゃをしてもらったけれど、ききめがなく、これから、いやがるのをつれて、手術しゅじゅつをうけに医者いしやのところへ出でかけられるのだ——と、ほんとうのことを話はなしたのでした。女おんなこじきは、そのことを人事ひとことと思おもわず、耳みみをかたむけて、聞きいていましたが、

「それなら、いい葉くすりがあります。このへんにもある草くさです。私わたしのいうことを信しんじて、ためしてごらんなさい。私わたしども金かねのないものは、神かみさまの教おしえてくだされたもので、どんな病やまいもなおします。その草くさは、秋あきになると、黄色きいろな花はなの咲さく厚あつい葉はです。その葉はを火ひにあぶり、やわらかにして、傷口きずぐちにはります。痛いたみはじきとれて、四よ、五日にちもすると、うみが出て

なおります。」と、ていねいに教えました。

母親と正吉は、これを聞いて、一すじの光が、急に、やみの中へさしこんできたような感じがしました。

「その草というのは。」と、母親は、すぐにも知れたかったです。

「ちよつと、さがしてきます。」と、女こじきは、門から出ていきました。

親子は、そのうしろ姿を、とうとう思つて、おがまんばかりに見おかつたのです。そして、いくたびも、母親は外まで出て、女こじきかもどるのをまつていました。

あまりおそいので、その葉が見つからぬので、そのままどこへか立ちさりはしなかったかと思ひ、うたがい、なやんだりしたが、そのうち女こじきは、手に青い葉をにぎつて、母親の前へあらわれました。

「まあ、ありましたかね。」と、とびつくようにして、母親はむかえたのです。女こじきがつくつてくれた葉をつけると、ふしぎに痛みがうすらいで、その晩、親子は、はじめ、気もちよくねまりました。

正吉は夢の中で、あのおじおじしたようすで、いたわりながら、薬をつてくれた女こじきを思い出して、いつまでも、その姿が、目からきえずにのこっていました。

それから、二、三日もすると、足のはれがひいて、きず口に、白いうみをもちました。母はこれを見て、おどろき、

「正吉や、もうだいじようぶだよ。草の名を、よく聞いておくのだったね。あの女ごじきに、お礼をいわなければなりません。いつもは、見なかった女ですのに、あの日どうしてきましたか。こんどきたら、おまえの小さいときの着物がありませんから、赤んぼにやりたいと思います。気をつけていて、見たら家へつれてきておくれ。」と、いつになく母は、きげんがよかったです。

正吉は足がよくなったのを、わがことより、よろこんでくれる母を見て、真にその恩を、わすれてはならぬと思いました。

いよいよ明日から、ふだんどおり、武夫くんと学校へいけるようになった、その前の日のことでした。

「正吉や、なにかおまえに、ほしいものがあるなら、おいしい。」と、母は、つくえの前にすわっている正吉に、たずねました。

これを聞くと、たちまち、小さな胸へ、よろこびが泉のように、こみあげました。「青い飛行機と、赤い人形と、どちらにしようかな。」と、耳のあたりまで赤くしな

がら、正吉は答えたのです。

「それは、なければならぬ品ですか。」と、母は聞きました。

「おかあさん、それより、早くおじさんに、お金をかえしたほうがいいよ。」と、正吉はいいました。

「ああ、その金は、きつと、私がそのうち、もっていきますよ。これは、おまえがつかわずにすんだので、あげますから、すきなものを、お買いなさい。」と、母はひきだしから、いくらかの金をとつて、正吉にあたえたのでした。

いま、青い、飛行機でも、赤いおどり子の人形でも、正吉のすきなものを、買うことができるのでした。しかし、もう、それを買う気が、なくなっていました。

「どんな色でも、そろっている上等のクレヨンを買おう。」と、正吉はすぐに、心をきめたのでした。

晩になると、原っぱへいつて、草の上に、こしをおろしました。そこここに、いつものように、赤い花がさき、青い空は、はてなくひろがつて、地平線につづき、夏を思わせる金色の雲が、西の方からわき出て、音なく、頭の上を、うごいていくのでした。

その雲には、おかあさんがすわつて、仕事をしていました。また、ほかの一つの雲には、

乳飲^{ちの}み子^ごをおぶった女^{おんな}こじきが、のっていました。二つの雲^{くも}は、たがいに近^{ちか}づき、また、あるときは、かさなり合う^あようになつたが、そのうち、はなればなれとなつて、いつしか、青^{あお}い空^{そら}へ、すいこまれるように、きえてしまいました。

青空文庫情報

底本：「定本小川未明童話全集 14」講談社

1977（昭和52）年12月10日第1刷発行

1983（昭和58）年1月19日第5刷発行

底本の親本：「うずめられた鏡」金の星社

1954（昭和29）年6月

初出：「い」どものせかい」

1953（昭和28）年6月

※表題は底本では、「空《そら》にわく金色《きんいろ》の雲《くも》」となっています。

入力：特定非営利活動法人はるかぜ

校正：酒井裕二

2018年6月27日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<https://www.aozora.gr.jp/>）で作ら

れました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

空にわく金色の雲

小川未明

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>